

高 深 度 潜 水

矢 野 芳 樹

浜坂港を後に見ながら私達の舟は日本海を北東に進んだ。海の色が変わり紺色に輝いた頃、進路を北に変えて矢城の鼻を右手に、荒磯大島を左手に見ながら潜水地点を探し求める。海図をにらみこの辺は32m、この辺は40mと、舟頭の山本さんと相談しながら適当な場所を探し、水深54mを少し北に行つた所に舟を止めてもらう。ザイルにウエイトを結びつけ、先ず水深を計ろうとしたが潮の流れでザイルが斜めになり、ザイルを60m伸ばしても底につかない。舟をいかりで固定することが出来ないで舟も流されているわけだ。ザイルがなるだけ真直になる様に山本さんに協力してもらい、舟を動かして、何とか底にとどいた。65m程ザイルが伸びている。エンジンを止めるとまた流されるので、ずつと舟を移動しながら金子さんと松本君が早速ウエツトスーツをつけ海に飛び込む。ザイルにつけた5m間隔の印が海にとけ込んでいる様だ。

身体中に50m潜るんだという緊張感がみなぎる。福山君、杉井君、吉田君も舟で落着いて見ている心境ではないらしく、2人に続いて飛び込んだ。確保はとりやめにしてザイルに沿つて潜ることにして、松本君は10ℓダブルボンベ、金子さんは12ℓシングルボンベを背負つた。簡単な打合せの後2人はならんで潜つていつた。ザイルの脇を黄色のボンベがだんだん小さくなつて消えていつた。吉田君、杉井君が素潜りで追つて行くがとて

もボンベにはとどかない。一年生2人にザイルにつたわつて浮上してくる2人を見守るように命じて舟の上では相変らず舟をあつちへやつたり、こ

つちへやつたりザイルを垂直に保つよりにしてゐる。— 水深30m以上潜る場合に問題になるのは窒素酔いと潜水病であろう。窒素酔いというのは空気の約80%を占める窒素が4気圧以上の圧力下で空気を吸うと血液中に多くとけ込み、そのためアルコールに酔つたような気分になり、思考力が減退する。潜水病は深く潜ると呼吸する空気圧が高くなり、窒素酔いのように多くの窒素がとけ込む。急に浮上すると水圧が低くなり、血液中の窒素は過飽和状態になり、コーラのビンを開けた時のように泡を作る。この泡によつて血液の循環を止めたり体の一部を破壊したりして神経痛、半身不随ということになつたりする。これを防止するために浅い所に少しの間とどまる減圧が必要なのである。

やがて舟から20m程離れた所に浮上してきた。ザイルに伝つて潜らなかつたらしい。早速舟に上げ水温、透明度、減圧時間、海底の様子などを聞いた。ザイルは途中で見失なつたとのことで、底の方も明るいらしい。水深は思つたより深く62～63m位である。どちらも興奮ぎみで日頃の冗談が出てこない。検圧してみるとダブルボンベが72気圧、予定通りである。もう一本の新しい12ℓシングルボンベが130気圧で、今度は福山君と私が潜水する。福山君がダブル、私がニコノスを持つてシングルを背負うことにして、ザイルはあつても邪魔になるようなので無視して潜ることにした。底の見えない所を潜る時は何となく無気味な感じのするものであるがボンベをつけているといくらか安心して潜れる。

60 mの海底に向つて潜りはじめた。我々の周りには一分のすきもなく紺色がとりまいてゐる。レギュレーターも快調である。海水に圧されながらもレギュレーターから出た泡がもがきながら同胞のいる水面に向つて上つていく。小さいクラゲが所々に浮かんで無関心を装っている。3度ほど耳抜きをして周りを見回すと福山君がいない。これは大変だと思つたが、上を見ると10 m程の所で止まつている。耳抜きが出来ないのかなと思ひ近づくともOKのサインが出た。大丈夫らしい。潜水には2人以上で潜るのが原則であるから1人の調子が悪ければ中止せねばならない。目と目の間を指で示していたから副鼻腔がつまつていたのだろう。さかんにOKのサインを出しているので再び潜りはじめた。時計を見たり、水深計を見たりしているといつの間にか海底が遠くに見えた。案外早く底が見えたので二人で顔を見合せていると、スーツと海底にすい寄せられるように沈んでゆく。福山君がもつている水深計をのぞきこむと針がふれ切つている。水深計の最高深度が60 mなのである。透明度は15 m〜20 mであろう。底は砂地で一面に茶色くこけのようなものがくつついてゐる。太陽の光が底に反射して割合明るく、我々がいる周辺はスポットライトを当てられた舞台のようである。60 m離れた別世界というより小さな空間といつた方がいいかも知れない。言葉のない世界でもある。レギュレーターを通して呼吸する音だけが耳に響く。福山君に向つてニコノスのシャッターを切つたがシャッターは停止位置に止らない。水圧の影響であろう。空から飛びおりたようなかつこうで海底に足ヒレをつけアポロ飛行士のように歩こうとするが水の抵抗で歩けない。無重力地帯である。10 m程向こうに小魚が群をなして泳いでゐる。追つてカメラにおさめようと思うが動きがにぶく何となくおつ

くうである。窒素酔いの症状に違いない。ずうつとこのままでいたいような気になり、また恐怖感も湧いてくる。もう浮上しなければと夢中で思い福山君に合図を送る。わずか3分の間であつた。ウェットスーツが水圧で薄くなり浮力が減つてゐるので力を入れて足ヒレを動かさなければならぬ。ロケットが離陸する時の感じで真直上つて行き、先程いた海底がしだいに遠のいていく。それに従つて頭もはつきりして、窒素酔いがおさまつてきた。福山君の姿を写真にとる。福山君は水深計を見ながら減圧する水深を知らせる。減圧表を持つて来なかつたので勘にたよるほかないが60 m往復した程度の潜水なので減圧時間もほんのわずかである。水深計と水面を交互に見ながら10 mの所で停止した。ポンベの空気はまだ50気圧は残つてゐるはずである。60 mの海底をもう一度頭に浮べながら、時には水深8 mになりまた10 mになり、10分間減圧して浮上した。

60 m潜つたんだという実感が湧いてきた。舟からは100 m程離れてゐた。舟の上では心配してゐるだろう。15分しか過ぎてゐないのに皆の顔が見たかつた。舟に上つて一息ついて今度の合宿の目的の一つが達せられた感激を味わつた。ザイルを上げ、舟の上を片付けて帰路につく。

今回の高深度潜水はアクアラングの技術向上のワンステップにすぎない。水中カメラの耐圧、高性能な水深計、新しい課題も生れた。

減圧時間も正確、確実にしなければならぬし、確保の方法も考えなければならない。

より進んだ海底探検を追求し、さらに深く、長く、安全に。

トレーニングはまだまだ続くだろう。

(工学部3回生)